〔大和本草十二雜木〕黑モジ　山中ニ生ズ、葉ハ漆ニ似テ、又榎ニ似タリ、葉ニ大小ノ異アリ、冬ハ葉落ツ、皮黑クシテ香氣アリ、故ニ是ヲ用テ牙杖トス、皮ヲツケ用ユ、

○按ズルニ、近世小楊枝ヲ作ルニハ、多ク此木ヲ用キルナリ、

〔嬉遊笑覽二中服飾〕今牙杖に削り造る木、黑もじ、かんぼく、白楊等あり、黑もじは、木の高さ一丈許に至り、葉椎に似て鋸齒なし、春若葉の出る時黃花咲、秋丸き實なる榎に似たり、皮は色青く、黑き斑あり、

〔和漢三才圖會二十五容飾具〕楊枝　剔牙棒　齒木略中

按、楊枝卽削楊柳枝[扞セル]牙齒間者也、桃枝亦佳、但有節者不可用、

〔嬉遊笑覽二中服飾〕かんぼく、同書大和本草云、肝木、漢名未詳云々、この木江戸にも處々にあり、葉は對生にして三尖なり、形楓葉に似て大さ一寸許、木はひよどり上戸に似たり、香氣あり、これには大和本草にも牙杖にするよしを云ず、

〔都風俗化粧傳上顏面〕疣をとる傳

杉楊枝にて疣をなで、其やうじを黑やきにして、やうじに火をつけ、ちやわんにてふせ置べし、粉にして、胡麻の油にてとき、疣に付べし、

〔類聚名物考十調度〕楊枝略中　世に傳へし天滿宮の御詠といふものにも、竹のやうじと見えしは、まことゝも、思はれねども、これらも、久しき諺にや、

〔嬉遊笑覽二中服飾〕牙杖の原、竹をも用ひたり、然るに菅家神詠とて、みる石の面に物は書ざりき竹のやうじもつかはざりけり、と云る歌を傳へたるは、何ものゝさかしらなりけん、抑意義なき事ながら、そのかみさる俗習ありしにこそ、

○按ズルニ、本文ノ竹ノ楊枝ノ歌ハ、類聚叢林和歌集卷四十二ニ菅家御詠トシテ之ヲ擧ゲタ